



# 京大広報

No. 637

2008.9



京都大学オープンキャンパス2008  
—関連記事 本文2699ページ—

## 目次

京都大学図書館機能の発展をめざして —2008年附属図書館リニューアル— 図書館機構長・附属図書館長 大西有三……2696	京大病院 看護フェア in オープンホスピタル 2008を開催……2707
〈大学の動き〉 理事が発令される……2698 部局長の交替等……2698 白浜海の家竣工披露式を挙げる……2698 「京都大学オープンキャンパス2008」を開催……2699 外国人留学生歓迎パーティーを開催……2700	瀬戸臨海実験所の実習船「ヤンチナ」をお披露目 ……2708
〈寸言〉 グローバル化と京大 奥 正之……2701	教育実践コラボレーション・センター公開 シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革 の動向」を開催……2709
〈随想〉 「幸福論の講義」 名誉教授 新宮秀夫……2702	グローバルリーダー育成カップ2008の 最終選考会・表彰式を開催……2709
〈洛書〉 経済発展すると環境が良くなる社会への道 —一方井誠治……2703	「外国人留学生の在留審査手続の申請取次に係る 研修会」の開催……2710
〈荣誉〉 田中 功教授がフィリップ・フランツ・フォン・ ジーボルト賞を受賞……2704	〈日誌〉……2711
松本 紘名誉教授(理事・副学長)が Booker Gold Medal を受賞……2704	〈訃報〉……2712
〈話題〉 幹細胞研究支援議員連盟が iPS 細胞研究センター (CiRA)を視察……2705	〈公開講座〉 京都大学森林科学公開講座「森が拓く未来」…2715
京都大学材料系新技術説明会を開催……2706	〈お知らせ〉 総合博物館2008年秋季企画展「シルクロード発掘70年 —雲岡石窟からガンダーラまで—」……2715
ノーベル賞・フィールズ賞受賞者の展示コーナー を開設……2707	無料法律相談のお知らせ……2716
	宇治キャンパス公開2008 宇治キャンパスからのメッセージ —未来を拓くみんなの科学—……2716
	「テクノ愛'08」……2718
	〈隔地施設紹介〉 防災研究所附属流域災害研究センター 白浜海象観測所・大瀬波浪観測所……2719

## 京都大学図書館機能の発展をめざして — 2008年附属図書館リニューアル —

図書館機構長・附属図書館長 大西 有三

### はじめに

京都大学の図書館は、附属図書館をはじめ各部に属する60に近い図書館・室からなり、蔵書数は日本で第三位の630万冊を誇ります。

附属図書館は、京都大学創立2年後の明治32(1899)年に創設されて以来、109年の歴史を持ちます。三代目にあたる現在の建物は、昭和58(1983)年に建設され、25年が経過しています。その附属図書館の大改修が、京都大学重点アクションプランに採択され、今年度中に実施されることになりました。

### 京都大学図書館の現状

長い京都大学図書館の歴史において、近年の図書館を取り巻く変化には著しいものがあります。書籍や冊子体雑誌など紙媒体の資料のみならず、電子ジャーナルやデータベースなど電子媒体の資料が激増し、さらに情報流通、図書館サービスの電子化によって、ハイブリッド化が急速な勢いで進行しています。大学の教育・研究の発展のために、学術情報基盤の重要な機能を担う図書館の更なる充実・強化が必須となっています。

京都大学独自の変化としては、法人化後の平成17(2005)年に京都大学図書館機構が発足し、全学的な協力体制のもとに全学図書館機能の充実が図られてきました。

平成20(2008)年から全学提供雑誌を電子ジャーナル主体契約に移行し、提供電子ジャーナルは2万5千タイトルを超えました。京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI 紅)も軌道に乗り、京都大学の研究・教育の成果物である論文等の学内外への発信も現在2万件を超えました。また、遡及入力(蔵書目録情報の電子化)の推進により、京都大学の蔵



書の約60%以上がカード目録を検索しなくても、ネットワークにより学内のどこからでも検索できるようになりました。学生用図書の実、京都大学図書館の特色ともいえる貴重

な古典籍の修復も計画的に進めています。これらの図書館機構の活動は、図書館協議会の熱心な審議や、大学本部のご理解と予算措置等の支援、部局のご協力のお陰と感謝いたしております。

### 附属図書館の改修

図書館機能の電子化により、図書館に出向かなくてもどこからでも多くの図書館サービスを受けられるようになってきました。また、附属図書館は平日22時まで、土日祝日も開館しており、平日の入館者は平均約3000人、最高6000人に及び、さらに入館者数は年々増加しています。しかし、一方でキャンパスミーティング、京都大学学生生活白書、Suggestion Box(意見箱)へは、利用時間の延長や24時間開館等、多岐にわたる要望が寄せられました。

近年、ラーニングコモンズ = 「場としての図書館」機能が重視され、要望も強くなっています。そこで附属図書館では、これまで利用者の要望に応えられていなかった24時間開館も含め、多様な利用者ニーズに応える全館改修案を昨年度重点アクションプランに提案して、今年度の改修事業が認められました。

具体的には、24時間利用可能な「自学自習室(90席)」の新設、多様な利用形態に対応可能な研究個室(14室)・共同研究室(5室)の整備、インターネット環境の充実・強化、開架図書の増強(13万冊)、飲食

可能スペースの整備等利用環境の改善を実現します。

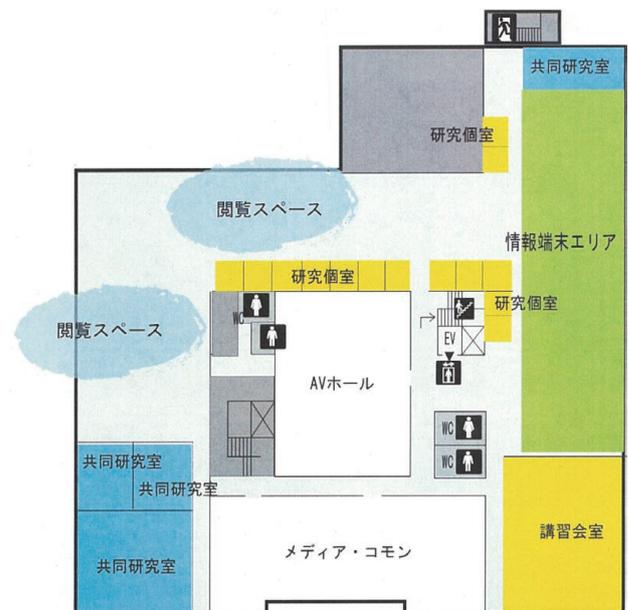
この改修にともない、10月は入館不可となりますが、閲覧席利用を除くサービスはできる限り継続できるように努力します。1階は、12月末完成で1月にはオープン予定です。大幅な改修を行う3階は3月末に完成予定です。しばらくご不便をお掛けしますがご理解ください。改修の詳細については、webページ(<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/etc/somu/kaisyu08.html>)等でお知らせします。

なお、24時間開館の「自学自習室」については、附属図書館として安全に十分配慮いたしますが、利用者全員がルールを守り快適に活用していただくようお願いいたします。

#### おわりに

平成20(2008)年3月に図書館機構の将来構想案を提示し、図書館協議会で成案作りに取りかかっている。全学図書館機能のさらなる発展を目指しています。皆様のご理解、ご協力、ご支援をお

願いたします。



3月オープン予定の附属図書館3Fフロア図



1月オープン予定の附属図書館1Fイメージ  
(飲食可能コーナーより:自学自習室を望む)

## 大学の動き

### 理事が発令される (新任)

木谷雅人理事の辞任に伴い、新理事に大西珠枝前文化庁文化財部長が7月23日付けで任命された。大西理事は副学長を兼務する。任期は平成20年9月30日まで



### 部局長の交替等 (再任)

#### 次世代開拓研究ユニット長

森山裕丈工学研究科教授(原子核工学専攻核エネルギー工学講座担当(核材料工学))が、7月31日付けで次世代開拓研究ユニット長に再任された。任期は平成22年7月30日まで。

#### 女性研究者支援センター長

稲葉カヨ生命科学研究所教授(高次生命科学専攻体制統御学講座担当(免疫学))が、9月5日付けで女性研究者支援センター長に再任された。任期は平成22年9月4日まで。

## 白浜海の家竣工披露式を挙げる

白浜海の家竣工披露式が7月12日に行われた。

同施設は昭和10年に付設されて以来、京都大学の学生・教職員の課外活動及び福利厚生施設として

利用されてきたが、近年は老朽化が著しく進んでいたことから今回全面改築した。

京都大学関係者と白浜町関係者の約50名の出席を得て行われた竣工式では、尾池和夫総長の挨拶に続き、立谷誠一白浜町長から祝辞をいただき、設計を担当した地球環境学堂の小林正美教授の建築説明があった。

その後は出席者全員に建物内の様子や設備を披露し、隣接するプライベートビーチを望む会場で懇親会が行われ、和やかな雰囲気の中で、新しい京都大学白浜海の家を祝った。

なお、改築に際して採用した「j.Pod 工法(新たな木造建築工法)」は間伐材利用による資源の有効活用と耐震性を兼ね備えた、本学が産学連携により開発



竣工式で挨拶する尾池総長



白浜海の家

した独自工法であり、白浜町に近い京都大学和歌山研究林の間伐材を利用することにより、木材の移動にかかるCO<sub>2</sub>排出量の削減にも取り組んだ。地産地消により環境負荷を軽減する建築及び東南海地震による被害が予想される地域における防災建築として全国のモデルになることが期待されている。

利用申込については下記 URL をご覧ください。  
[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/facilities/outside/fa\\_sirahama.htm/](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/facilities/outside/fa_sirahama.htm/)

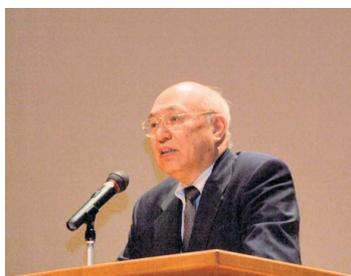
(学生部)

## 「京都大学オープンキャンパス2008」を開催

京都大学オープンキャンパス「輝く個性で、知を磨く」が8月7日(木)・8日(金)の両日、全国各地から高校生、保護者、引率者等約9千2百人の参加のもと開催された。

今年で7回目を迎えるオープンキャンパスは、初日を総合人間学部・文学部・教育学部・法学部及び経済学部の文系5学部、2日目は理学部・医学部・薬学部・工学部及び農学部の理系5学部に分けて実施した。

オープンセレモニーは百周年記念ホールを会場として、両日とも500名の定員で行われ、オープンキャンパス委員会・松本吉泰委員長の



歓迎の挨拶をする東山理事・副学長

司会進行により、はじめに東山紘久理事・副学長から「ようこそ、オープンキャンパスへ」と歓迎の挨拶があり、続いて尾池和夫総長が「京都大学をめざすみなさんへ」と題して、京都大学の歩みと現状そし

て未来について語った。

その後、京都大学応援団による力強い演舞とユーモアを交えた受験合格への熱いエール



応援団による演舞

が送られ、参加者から盛大な拍手が沸き起った。

最後に在學生からのメッセージと題して、初日は文学部3年の前川祐子さんが、二日目は医学部医学科4年の河路光介さんが、それぞれ自らの受験や就学体験を熱く語り、オープンセレモニーは閉会した。

百周年時計台記念館国際交流ホールには、入試・学生生活・就職・留学・キャンパスライフ・環境等の相談コーナーが開設され、参加者や保護者からの相談や質問に職員や在學生が答えた。また、同ホー

ルでは、参加者と在學生が受験勉強や学生生活に関する様々なことを、親しく語り合う在學生交流コーナーが設けられ、両日とも大勢の参加者で賑わい、熱気溢れる中にも和やかな交流風景が見られた。

この他、百周年記念ホールでは、次の企画が実施された。

### ○講演「京大教員による講演会」

- |     |           |        |
|-----|-----------|--------|
| 1日目 | 人間・環境学研究科 | 富田恭彦教授 |
|     | 教育学研究科    | 鈴木晶子教授 |
| 2日目 | 農学研究科     | 伏木 亨教授 |
|     | 理学研究科     | 柴田一成教授 |

### ○講演「京都大学で環境問題に挑む！」

環境保全センター 川崎昌博センター長

人間・環境学研究科修士課程2年 根本潤哉氏

### ○パネルディスカッション「在學生が語る学生生活、クラブ・サークル紹介等」

学部説明会では、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等が実施された。各会場では、教職員や在學生の熱意が伝わったかのように、多くの参加者が真剣な表情で説明に聞き入り、関心の高さがうかがえた。特に、総合人間学部は、学部では初めて参加定員を設けない自由参加制で実施し、吉田南構内は多くの参加者で賑わった。



経済学部の模擬講義

(学生部)

## 外国人留学生歓迎パーティーを開催

総長主催による新入外国人留学生の歓迎パーティーが、7月7日(月)午後6時30分より、京都大学百年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催され、約400名が出席した。

1961年から開催されているこのパーティーには、理事・副学長をはじめ、部局長、指導教員、学外団体等の関係者が出席



挨拶する尾池総長と  
英語・中国語・韓国語で通訳する留学生

し、和やかな雰囲気の中、留学生達を囲んで交流が行われた。

美しい七夕飾りが彩りを添えるパーティー会場では、尾池和夫総長の歓迎の挨拶と新入留学生を代表してイギリス出身のアリソン・エヴァンスさん(日本語・日本文化研究研修生)の流暢な日本語と英語によるスピーチの後、横山俊夫副学長・国際交流推進機構長による乾杯の発声で始まった。総長は挨拶の中で京都の豊かな地下水により古都の文化が発展したことに触れ、京都府名誉友好大使に最近任命されたブルガリア出身のミホフ・ローセンさん(理学



熱気あるパーティー会場

研究科)、中国出身の徐鶴さん(工学研究科)、韓国出身の宋仁煥さん(情



短冊を吊す留学生

報学研究科)がそれぞれ英語、中国語、韓国語で通訳した。

また、恒例の歓迎イベントでは「京都大学吹奏楽団」の歓迎演奏が行われ、宮崎駿アニメ「となりのトトロ」等のテーマ音楽やカーペンターズメドレーを披露した。また京都大学公式チーム「彩京前線」による迫力ある演舞「京炎!そでふれ」が留学生たちを魅了し、パーティーは最高潮を迎えた。

続いて理学部国際交流室・鈴木在乃講師の歌唱指導で「七夕さま」を全員で合唱すると、自国の歌を披露したいとフランス、インド、ベトナム、チュニジア、中国、モザンビーク、台湾などの留学生達も次々と舞台に立った。

また、七夕短冊コーナーではチューターのアドバイスで、留学生は様々な願いを書いて笹飾りに吊していた。なかには「授業料が全学免除になりますように」「日本語が上達しますように」という切実なものもあった。

そして楽しい時間はあっという間に過ぎ、参加者にとって思い出深い夕べとなった。

(国際部)

## 寸言

## グローバル化と京大

奥 正之

祇園祭、五山の送り火と続く夏の恒例行事が終わった後の9月の京都は、静けさの中にまだまだ残る蒸し暑さがこたえる時期だ。

私が京大を卒業してから今年で丁度40年になる。住友銀行に入学し、大阪勤務を振り出しに国内三カ所、米国二ヶ所と転居が続き、現在は東京に住む私であるが、京都に来ると本当にホッとした気持ちになる。小学校から京都で育ったことが大きな理由かも知れないが、それ以上にこの町には、山紫水明の豊かな自然、古い歴史と伝統の文化の重なり合い、それでいて常に新しい流れを取り入れ古きものと調和させて人の心を和ませてくれる不思議な魅力がある。京都の外に住んでみるとそれが実に良くわかる。

父そして兄二人に続いて幸い京大に進めたが、三番手へのプレッシャーにはかなりのものがあつた。法学部ではそれなりに勉強もしたが、専らワンダーフォーゲル部で、夏は登山、冬はスキーと結構忙しく過ごしたものだ。周囲の友人も、それぞれ好きな事を伸び伸びと追い求めていた。また、教鞭をとられる先生方には京大の伝統である「自由の学風」の中で、社会の風潮に流されず物事の本質を究めようとするタイプの方がまだまだ多かつた。この良き学風は今も変わらず受け継がれているものと思う。

さて、世界が日々小さくなっている中で、EUの拡大やBRICs諸国をはじめとする新興国の台頭、それに伴い顕在化してきた環境問題や資源制約さらにはサブプライム問題の世界への波及など、世界経済・社会の構造は大きく変化しつつある。もともと資源に乏しい日本は、世界との交流なしに生きてはいけないことは自明だが、その世界が大きく変わろうとしている今こそ、日本はグローバル化の中で成長を続けて行く将来シナリオを真剣に描き行動する時期に来ていることは間違いない。

そのグローバル化に関して、京大は、創立百周年



の1997年に、海外の協定校の学生と京大生が机を並べて英語による講義を受ける「京都大学国際教育プログラム(KUINEP)」を開始するなど、大学を挙げて国際的な学生交流を支援していると聞く。こうした取り組みもあって、京大は、近年、アジアを中心に毎年千人を超える外国人留学生を受け入れる一方、世界各国に2～3百名の海外留学生を送り出しているという。若い世代が異なる文化や考え方に触れ議論を交わすことは、グローバル化時代において極めて重要な将来財産である。

私自身も、入行後6年目の時に、米国ミシガン大学のロースクールで2年間勉強する機会を得た。ここでの経験は、知識の習得はもとより政治・外交・社会の課題解決に果敢に挑戦する米国を知る一方で、改めて自分を見つめ直し、日本を考え直し、視野を世界に広げるまたとない貴重な機会となった。そのロースクールでは、米国内外の大学・研究機関・政府機関等に積極的に出て行き、再び大学町へ舞い戻って研究・教育に没頭するパターンを取る教授陣が多かつた。翻って、静かな古都で、雑事や雑音に煩わされず、研究や学業に打ち込めるのが京大の良いところである。然し、それが「出不精」に繋がって貰っては困る。外に積極的に打って出て、再び京都に戻ってじっくりと思索・研究する、そのためには国際観光都市京都を出汁に外から人を招き協働すると言う、いわば「良いとこ使い」を徹底するという発想がグローバル化時代には重要ではないか。

グローバル化は不可逆的な流れであり、これに正面から向き合わないと日本の将来は暗い。独創性やアイデンティティがより重みを増してくるグローバル化時代にあつては、国内の東に対する西という比較対置ではなく、京都という日本文化の伝統と国際性を兼ね備えた都市に所在する独自のアドバンテージをフルに活かし、自由の学風の伝統に加えて、外に出て内に受け入れる開放的な気風を定着させることを通じ、京大が、日本に、そして世界に一層発信し貢献してゆくことを期待している。

(おく まさゆき 株式会社三井住友銀行頭取  
昭和43年法学部卒)

## 随想

## 「幸福論の講義」

名誉教授 新宮 秀夫

幸福論の講義を KUINEP (Kyoto Univ. International Education Program) の学生と全京大生とを対象に始めて今度の秋で4回目となります。留学生をも対象とするので、タイトルも正式にはHAPPINESSであり講義は英語です。



幸福について毎週1時間半、1学期で12回、一体なにを講義しているのか?といぶかしく思われる方も多いでしょう。既に3期をこなした今になって、よくぞ平気でこんな破天荒なことを始めたものだと驚いている次第です。ネットで検索すると、幸福についての講義がアメリカでは最近いくつか始められていることが判り、ハーバード大学でも2006年に開講され人気を呼んでいるようですが、KUINEPの講義初回は2005年秋ですから京都大学はここでも時代の先を進んでいるといえるのでしょうか?内容はシラバスを見ていただくか、「幸福論の総括」というキーワードでインターネット検索すればサマリーがヒットするのでさて置いて、ここでは講義を通じての感想、感慨など、つまり随想?を書かせていただきます。

講義の場所は正門横の赤レンガ棟、旧工学部燃料化学教室の第一講義室、私も福井謙一教授の統計熱力学の授業を受けたことのある木造の階段教室です。ギシギシ床鳴りのする100名ほど収容の部屋に、ハピネス講義の初回になんと学生が溢れて廊下にまで立っていたのがまず驚きでした。最先端技術でも財テクでもない授業に学生が競って集まるのは日本の将来にとって喜んでいいか憂うべきなのか・・・?

KUINEP 留学生は国籍が多様で、しかも分野も様々なので面白いですが、学部学生の所属も驚くことに全学部にわたっています。本当に全学部かな?と京大職員録をめくって確かめたのですが、確かに全学部から複数の学生が聴きに來ています。まるでアリストテレスの幸福論(ニコマコス倫理学)を地で行くように、幸福こそが、すべての分野の究極目的

であるという実感が湧くではありませんか?!

私はいつも学生に話しかけて、君はどう思うか?と聞くのですが、この講義では学生の所属が多様なので質問の甲斐があり、ハッとするような返答を受けることがあります。学生達もお互いに自分と違う専門を目指す学生の発想に興味を示しているようです。英会話の教室でなく、幸福という共通の関心事の概念を自分で納得していく過程で、学生が英語で発言し、留学生とも討論できるのはKUINEPならではの機会といえるでしょう。

ヨーロッパからの学生に質問していて感じるのは、彼ら彼女らが聖書を読まず、神を信じる(敬う)気持ちを全く持っていない様子であることです。日本でも経典を読む若者は少ないようですが、それは読まなくても有り難いものである、という気分はなくなっています。同じ雰囲気はアジアからの留学生に質問した時のレスポンスからもわかります。

それで、何を拠りどころにして生きているのか?とヨーロッパからの学生に尋ねると“reason(理性)”だということです。“悲しみは笑いにまざる、悲しい顔は良い心をつくるから”という聖書コヘレトの言葉などは理性を超えた感情によって分るのだろうと思うのですが、それを読もうとしないのでは、チベット仏教で知られる寂天(入菩提行論)のいう“幸福を求めながらまるで敵のように幸福を打ち壊している・・・”ことにならないよう願うのみです。

熱心に学生が授業に出てくれるのも楽しいですが、前回の講義の時の最終レポートに、ある学生が「この授業では話題が飛躍して時には困っていた(I often felt somewhat frustrated・・・)が、最後の授業で受け取った“幸福論の総括”を見て話がつながった、やっと分かった、感動した」と書いているのを読んだ時には、こちらが大いに感動した次第でした。

半世紀も自分より若い人達に感動をあたえる機会を持てるのは素晴らしいことです。中学校で習ったロングフェローの詩“矢と歌”の一節が思い出されますが、ささやかな矢が、将来の社会をになう何人かの青年の胸に留まってくれば、それにまざる幸福は私には考えられません。

(しんぐう ひでお 平成13年退官 元エネルギー科学研究科教授、専門はエネルギー社会工学)

## 洛書

## 経済発展すると環境が良くなる社会への道

一方井 誠治

1951年生まれの私にとって、子供から大人になるまでの間、日本はまさに戦後の復興期で高度経済成長の時代だった。

大ヒットした日本映画「ALWAYS 三丁目の夕日」にも描かれていたように、多くの家に初めてテレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫が入り、汲み取り便所から水洗トイレへ、そして憧れのマイカーの購入と日常生活は劇的に変化していった。その反面、身の回りの自然は次第に姿を消し日本各地で産業公害にともなう激甚な公害が起こり、たくさんの人々がその犠牲となった。環境保全と経済発展はどうしてもぶつかりあってしまうというのが私も含めた当時の多くの人々の実感だった。

しかしながら、四日市喘息や水俣病などの激甚公害の経験から、公害の後追い対策は企業にとってものに高くつくものかを日本は身をもって体験し、公害の未然防止は経済の発展にとってむしろ不可欠の要素となっていった。その意味で、こと公害問題に関する限り、日本そして先進国においては、環境保全と経済発展は基本的にぶつかりあうものではなく相互に補完しあうものになったといえよう。

それが、気候変動問題が環境問題の前面に出てくるに至り、再び、環境の保全と経済発展とがぶつかりあうという状況に戻ってしまったというのが、ここ10年余の世界の状況である。よく言われるように、少なくとも先進諸国においては、公害の防止については技術的な解決が可能となったのに対し、気候変動問題への対処に当たっては、先進諸国といえども技術的な解決策が必ずしも十分に揃っておらず、化石燃料使用への制約による経済活動への悪影響が懸念されたことがその背景にある。

そのため、京都議定書による世界の温室効果ガス

の排出抑制は、当初の目論見どおりには進んでおらず、気候変動は加速的に進行しつつある。特に日本においては、温室効果ガス削減のための基本政策が確立されておらず、京都議定書目標の国内における達成も厳しい状況に追い込まれている。

その中で、EU 諸国では、1990年代からの炭素税導入をはじめに、2005年からはキャップ付きの域内排出量取引制度を導入するなどの積極的な気候変動政策を進めている。本稿では紙幅の関係もありその内容について詳しくは触れられないが、EU のこの政策は、単に環境保全のためだけではなく、石油資源等の高騰を見越し、EU における中長期的な経済発展をも見据えた「環境経済政策」となっていることにその特徴がある。一方、日本はというと、相変わらず、「環境政策」と「経済政策」が縦割りに行われている感があり、統合的な政策となっておらず、双方ともに効果的な政策となっていないという問題がある。

EU は、企業に対して厳しい面はあるものの、あえて市場を通じて、二酸化炭素の排出に価格をつけ、その削減のための技術開発・普及や社会構造の変革が経済的にも引き合うような仕組みを構築することを中心に、気候変動問題と経済発展問題の双方に対処しようとしている。言葉を変えると、EU は低炭素社会経済へのいち早い移行が、世界での EU の生き残りにとって有利と判断し、戦略的に関連の政策を進めていると私は見ている。

気候変動問題は単に、企業の自主取り組みや国民運動キャンペーンで解決できるような問題ではない。日本は、現在の世界最高水準の環境・省エネ技術に安住することなく、EU のような、環境保全がビジネスになるような仕組みを構築すべきである。そして、それこそが、経済が発展すればするほど環境が良くなるような持続可能な社会への第一歩であり、日本と世界がこれから生き残っていくための合理的な選択であると私は確信している。

(いっかたい せいじ 経済研究所先端政策分析研究センター教授、専門は環境政策)

## 栄誉

### 田中 功教授がフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞を受賞

田中 功工学研究科教授(材料工学専攻)が、2008年度フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞を受賞された。



フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞は、1978年に当時の西ドイツ大統領が来日したことを記念して創設されたもので、毎年、優れた業績を挙げ、日本とドイツ連邦共和国の文化・学術交流に貢献のあった50歳以下の日本人研究者1名に授与され、今年で第30回目を迎える。田中教授の受賞は、材料科学分野では初めてであり、京都大学からの受賞は第1回の沼正作博士から数えて5人目となる。

田中教授は、昭和57年京都大学工学部を卒業後、同大学院工学研究科修士課程、大阪大学大学院基礎工学研究科に進学し、同62年に大阪大学工学博士の学位を授与された。その後、日本学術振興会特別研

究員、大阪大学産業科学研究所助手を経て、平成5年京都大学工学部助手、同8年同大学院エネルギー科学研究科助教授、同13年同大学院工学研究科助教授、同15年同教授となり、現在に至っている。

田中教授は、これまで、セラミックス材料科学の分野で優れた業績を挙げる一方、ドイツ人研究者との共同研究やドイツの研究プロジェクト評価等ドイツとの研究協力活動を展開し、それらの評価が今回の受賞につながった。

なお、授与式は、6月24日にベルリンのドイツ大統領官邸にて行われ、ドイツ連邦共和国大統領より直接、田中教授に賞が授与された。

今回の受賞は、田中教授だけでなく、工学研究科、また、京都大学にとっても大変名誉なことであり、今後、田中教授には更なる研究の発展とともに、この分野において多くの後進の牽引も期待される。

(大学院工学研究科)

### 松本 紘名誉教授(理事・副学長)が Booker Gold Medal を受賞

松本 紘名誉教授(理事・副学長)が国際電波科学連合(URSI)より、2008年 Booker Gold Medalを受賞された。



Booker Gold Medalは、電波科学における著しい業績をあげた研究者に対し贈られるもので、3年間に1人が選ばれている。2002年、2005年にそれぞれカナダ人、アメリカ人が受賞されており、松本名誉教授は3人目の受賞者で日本人としては初めてとなる。松本名誉教授は、昭和40年京都大学工学部電子工学科を卒業、同大学大学院工学研究科に進学された後、同42年に京都大学工学部助手、同49年同助教授を経て、同62年に京都大学超高層電波研究センター教授に昇任された。その後、宙空電波科学研究センター教授、生存圏研究所教授を経て平成18年理事・副学長に就任、同19年京都大学名誉教授の称号を受

けられた。この間、平成4年から超高層電波研究センター長を6年間、同14年からは宙空電波科学研究センター長を2年間務められた。更に、平成16年からは生存圏研究所の初代所長として新研究所の基盤づくりに強い指導力を発揮し、研究のみにとどまらず、大学の管理・運営にも多大な貢献をされた。また、工学部電気電子工学科、大学院情報学研究科、大学院工学研究科の協力講座として人材育成にも取り組み、多数の優秀な人材を社会に輩出された。

今回の受賞は、松本名誉教授の「宇宙プラズマにおける非線形波動プロセスに関する研究成果、宇宙プラズマ計算機シミュレーション研究の推進及びプラズマ波動研究における国際的リーダーシップ」が高く評価されたことによるものである。

受賞式は、8月10日に米国シカゴで開催されたURSI総会において行われた。

Henry G. Booker教授は、ケンブリッジ大学、コ

ーネル大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校の教授を歴任した電波科学とくに電気通信の泰斗で、1981年から亡くなられた1988年まで中国武漢大学の宇宙科学部の名誉客座教授でもあった。松本名誉教授も Booker 教授の後任として武漢大学の名誉客座教授を務められている。

松本名誉教授は、上記の宇宙空間プラズマ中における非線形現象の理論・衛星観測・計算機シミュレーションを用いた研究により国際的に顕著な業績を

あげてこられた他、宇宙太陽発電所研究も推進された。また、1999年から2002年まで第20代 URSI の会長を務められ、電波科学の発展に国際的にも指導的立場で大きな貢献をされた。



(生存圏研究所)

## 話題

### 幹細胞研究支援議員連盟が iPS 細胞研究センター (CiRA) を視察

平成20年8月1日(金)、幹細胞研究支援議員連盟(会長 船田元衆議院議員)が物質-細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター(CiRA)を視察した。視察したのは、川端達夫衆議院議員、木俣佳丈参議院議員、とかしきなおみ衆議院議員、富岡勉衆議院議員、西村康稔衆議院議員、浜田昌良参議院議員、前原誠司衆議院議員、松浪健四郎衆議院議員、武藤容治衆議院議員の各議員(50音順)、菱山豊文部科学省研究振興局ライフサイエンス課長で、CiRAにおけるiPS細胞研究の最新状況を視察するため、来学となった。

再生医科学研究所で行われた現状説明では、松本紘理事・副学長の挨拶の後、山中伸弥 iPS 細胞研究センター長により、iPS 細胞研究の現状と問題点が報告された。また、CiRAの研究戦略に関する活動と知的財産にかかる企画・立案をするため、8月1日付けで設置された研究戦略本部・本部長に林 秀也教授が就任された旨報告があった。

その後、山中伸弥センター長、山下潤准教授並びに中川誠人助教の案内で、iPS 細胞研究センター(山中研究室・山下研究室)における iPS 細胞の作成、

培養、分離等の工程を視察し、特に、iPS 細胞から心筋細胞へ分化・誘導した細胞を目の当たりにした議員団から、iPS 細胞研究に対する更なる熱い期待が寄せられた。

CiRA 見学後の意見交換では、議員団より、知的活動に対する支援、今後必要となる人材育成の施策並びに臨床研究の指針の策定に関する質問があり、山中伸弥センター長をはじめ、松本紘理事・副学長、大西珠枝理事・副学長、戸口田淳也副センター長、林秀也研究戦略本部長、寺西豊産官学連携センター教授、石井哲也研究戦略本部研究統括室長等から、CiRA ないし京都大学における現状報告や具体的な人材育成の施策及び臨床研究の指針の必要性等の説明が行われた。



山中伸弥 iPS 細胞研究センター長



意見交換の様子

(物質-細胞統合システム拠点)

## 京都大学材料系新技術説明会を開催

産官学連携本部・産官学連携センターでは、8月8日(金)に(独)科学技術振興機構(JST)のJSTホール(東京・市ヶ谷)において、京都大学材料系の新技術説明会を開催した。この説明会は、JSTと国内の各大学とが共同で主催し、大学の所有する未公開特許を中心とした新技術を産業界に紹介し、共同研究や特許のライセンスなどに発展させることを目的とした技術説明会である。今回は本学から9名の研究者に新技術の説明をいただき、企業から開発部門の責任のある方々216名の参加を得た。

- (1) フコキサンチンによる血管新生抑制とシワ抑制効果

農学研究科 准教授 菅原 達也

- (2) スパッタ方式によるナノワイヤ大量生産手法

工学研究科 教授 斧 高一

- (3) 「理科」に隠されたハイブリッドナノコンポジット

原子炉実験所 助教 川口 昭夫

- (4) ビスマスの特性を活かした光カチオン重合剤の開発

工学研究科 准教授 俣野 善博

- (5) 入射光のにじみ由来の検出精度低下を解消した光散乱測定装置

化学研究所 准教授 西田 幸次

- (6) 貝殻ペプチドによる炭酸カルシウム結晶の形成制御技術

農学研究科 准教授 豊原 治彦

- (7) 高い可視光応答型光触媒活性を示すN-Si共ドーパチタニア

工学研究科 助教 岩本 伸司

- (8) 鉄ホスフィン錯体を触媒とした機能性芳香族化合物の精密合成

化学研究所 教授 中村 正治

- (9) C-H結合活性化によるアルケニル置換ヘテロ環の簡便合成

工学研究科 教授 檜山 爲次郎

また、各技術の説明後には、別室を設けて参加企業ごとに個別に対応する質問・相談コーナーのほか、



松重和美産官学連携本部副本部長の挨拶

説明会終了後には交流会を開催し、大学と企業との情報交換を活発に行った。

産官学連携本部・産官学連携センターは、本新技術説明会のほか、産業界との連携活動の促進・支援のための技術説明会や技術交流会などに積極的に参加している。

- (1) 産学官連携推進会議(H20. 6.14-15)
- (2) けいはんなビジネスメッセ(H20. 7.17)
- (3) イノベーション・ジャパン2007(H20. 9.16-18)
- (4) 中信ビジネスフェア2008(H20.10.16-17)
- (5) TOYRO ビジネスマッチングフェア2008(H20.10.16-17)
- (6) 知財ビジネスマッチングフェア2008(H20.11.26-27)
- (7) 京都ビジネス交流フェア2009(H21. 2.19)
- (8) 京都大学産官学連携フォーラム(未定)



熱心に聞き入る参加者

(産官学連携本部・産官学連携センター)

## ノーベル賞・フィールズ賞受賞者の展示コーナーを開設

桂キャンパス船井哲良記念講堂の1階エントランスホールの壁面に、京都大学を卒業したノーベル賞・フィールズ賞受賞者の展示コーナーが



ノーベル賞・フィールズ賞受賞者の展示コーナー

設けられ、7月16日(水)に記念式典が行われた。

この展示コーナーは、工学研究科の宗本順三教授の発案によるもので、ノーベル賞受賞者5名とフィールズ賞受賞者2名が若き日に著した論文や研究ノートを複製し、実際に手に取って見られるように展示されている。

各ブースに展示されているメダルや賞状の写真、論文や研究ノートの複製品などは、城下荘平元総合博物館助教授が実際に各受賞者や関係者を訪れ、ご協力をお願いし集められた。

また、実際にこの論文やノートを手にとって見ることで、その1頁1頁から受賞者の若き日の息遣い

や研究に対する熱い情熱が伝わり、新たな受賞者が誕生して欲しいとの願いから、次の受賞者のためのブースが設けられている。

式典では、尾池和夫総長より「京都大学出身者から、次の受賞者が出ることを期待している」との挨拶があり、続いて大寫幸一郎工学研究科長からも「若い学生の研究意欲を掻き立てたい」との言葉があった。その後、船井哲良船井電機株式会社執行役会長より祝辞が述べられ、テープカットが行われた。

式典の後、参加者は次々に論文や研究ノートを手にとって、受賞者の若き日に思いをはせていた。



テープカットの様子

(大学院工学研究科)

## 京大病院 看護フェア in オープンホスピタル2008を開催

8月2日(土)に京大病院 看護フェア in オープンホスピタル2008を開催した。今年で3回目となる同フェアは、地域住民、高校生や看護学生などに、院内各部門が安全で安心を得られる質の高い医療を提供していることや、病院で実施している活動を紹介しており、将来医療を担う人材として活躍していただける方のためにも、京大病院の魅力を十分に伝えることを目的として企画されている。

そのため、看護部だけではなく、薬剤部や検査部、疾患栄養治療部や事務部などの各部門も加わり、オープンホスピタルとして開催された。

当日は、リクルートスーツ姿の看護学生をはじめ500人以上の参加があった。外来棟1階アトリウム

ホールを会場とし、各診療科・部ごとの看護業務の内容を写真や資料を使って説明するパネル展示コーナーが設置され、看護体験コーナーでは、フィジカルアセスメント(身体所見)シミュレーションや静脈穿刺シミュレーション、BLS(一次救命処置)講習、その他検査部による超音波検査体験や疾患栄養治療部による栄養診断シミュレーション等が行われた。

また、ウェルネスエリアでは、正午から看護師等のフルート演奏によるミニコンサートが開催され、やすらぎのひとつとなった。

講演ステージでは、午前に尾池和夫総長による「地震を知って震災に備える」と題する講演が、午後には愛媛大学 藤崎郁教授による「看護のサイエンス

とアートをつなぐ～フィジカルアセスメントをケアにいかす～」と題する講演が行われ、参加者は興味深い表情で聴き入っていた。また、『おたんこナース』原作者の小林光恵氏が「そんな日もある!～ナースへの階段～」と題して看護の魅力を語られ、看護学生や新人ナースへ応援のメッセージを送られた。

病院見学ツアーも実施され、このフェアに参加した看護を学ぶ学生からは、「京大病院の看護業務を、授業で学習する以上に身近に感じる事ができた」「体験コーナーでは、とても貴重な経験ができた」「内容が盛りだくさんで、次回も来てみたいと思った」「京大病院について知ることができて良かった」「希望配置部署の看護師と話す機会が持てた」といった

声が聞かれ、盛況のうちに終了した。



パネル展示コーナーの様子

(医学部附属病院)

## 瀬戸臨海実験所の実習船「ヤンチナ」をお披露目

7月11日(金)、フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所の海洋観測研究実習船「ヤンチナ」の完成披露会が行われた。

先の実習船「ヤンチナⅢ」は昭和62年に建造され、21年にわたり瀬戸臨海実験所で教育・研究に活躍してきた。近年は老朽化も進み、パワー不足で速度が出ないなど利用海域が田辺湾内に限られてきたことから、平成19年度全学協力経費により代船の建造が認められ、この3月に完成、「ヤンチナ」と命名され4月から既に近海を航行している。ウィンチの設置により使える海洋測器がふえ、速度が上がったので串本湾など新たな領域をカバーできるようになった。

今回この「ヤンチナ」の勇姿を関係者に見てもらおうと、尾池和夫総長、松本紘、東山紘久両理事・副学長をはじめ京都大学関係者、田辺海上保安部、和歌山県教育センター学びの丘、白浜ロータリークラブ、白浜ライオンズクラブ等地元関係者、瀬戸臨海実験所研究員、大学院生、教職員OBの皆さんも参加して完成披露会が盛大に行われた。

式典では、白山義久所長の挨拶に続き、尾池総長の祝辞のほか、山本高正和歌山県教育センター学び

の丘副所長からも祝辞をいただき、その後、「ヤンチナ」の試乗会を行って参加者に新船のすばらしさを体験していただいた。また瀬戸臨海実験所の水族館等の見学会も行われた。夜には、懇親会が和やかな雰囲気の中で開催され、「ヤンチナ」の完成を祝い、未来の成果に向けて決意の場となった。

なお、「ヤンチナ」という船名は、アサガオガイの学名 *Janthina janthina* に由来している。この巻き貝は粘液で作ったうきぶくろを持ち、その浮力を使って生涯水面で過ごす。絶対に沈まないことから、この名前を船名に使っている。



海洋観測研究実習船「ヤンチナ」

(フィールド科学教育研究センター)

## 教育実践コラボレーション・センター公開シンポジウム 「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」を開催

教育実践コラボレーション・センター(2007年4月に教育学研究科に新設)による公開シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」が、7月31日(木)に芝蘭会館別館にて開催された。これは、昨年度の公開シンポジウム「日中の教育課程の動向」(2007年12月4日開催)を発展させたもので、日本、中国、そして韓国の教育課程及び教育評価の動向について、各国の改革の中心的メンバーによる報告が行われた。日本については、中央教育審議会委員として新学習指導要領(2008年3月告示)の改訂に携わった早稲田大学の安彦忠彦氏から、新しい学習指導要領の特徴や目指される学力像について報告がなされた。続いて中国・中央教育科学研究所の高峽氏からは、中国の教育課程を決定する「課程標準」の実施・改訂をめぐる動向について報告がなされた。そして韓国からは、ソウル大学教授の白淳根氏によって、韓国で国家的に進められている「遂行評価」を中心に教育課程・教育評価改革について報告された。同時期に進められている各国の改革についての報告からは、日中韓のそれぞれの改革の特色が明らかになったとともに、共通した方向性や課題が見出せた。ま

たフロアからは、各国の取り組みにおける現実的な問題やこれからの方向性について多くの質問が集まり、議論がより深められた。

参加者数は約80人のほり、会場は満席状態であった。大学院生、大学教員、小中高の教職員の方々はもちろん、一般市民の方々や文部科学省の磯田文雄氏も参加され、盛況のうちに幕を閉じた。

(本事業の一部は京都大学教育研究振興財団より助成を受けました。)



公開シンポジウムの様子

(大学院教育学研究科)

## グローバルリーダー育成カップ2008の最終選考会・表彰式を開催

ベンチャービジネスラボラトリーでは、8月3日にグローバルリーダー育成カップ2008の最終選考会・表彰式を開催した。

グローバルリーダー育成カップ2008は、全国の大学生から募集を募り「Global Future Innovation」をテーマに世界に革新をもたらす新型ビジネスプランを立案させるコンテストである。今回、全国から1,051名ものエントリーがあり、国内からは京都、東京、早稲田、慶応など全国の大学から、また海外からもアメリカ、中国、韓国、イランなど幅広い国籍の学生の応募があった。応募の中から書類選考を

通過したグローバルな顔ぶれの105名が京都大学に集まり、2泊3日の合宿を経て、百周年時計台記念館大ホールでの最終コンテストに臨んだ。

優勝チームは胡敏軒さん(ミシガン大)、Yin Jinghuaさん(慶応大)、秋田勇人さん(東京大)の3人の国際的混成チームで、テ



優勝チームの発表模様  
(左は松重和美副学長・VBL施設長)

マは「人工降雨」。人工降雨を利用し干ばつや災害を防ぐことを最終的に目指す新型ビジネスプランであった。優勝チームには賞金100万円が授与され、協賛機関・企業名等を冠した各賞の他、個人賞の稲着 達也さん(早稲田大)には、スタンフォード大学等への研修権が与えられた。

最後に、3日間を振り返るエンディングムービーが流れ、参加者の満足度も高く、感動に包まれた中で終了した。



表彰式後の参加者全員の記念撮影

#### グローバルリーダー育成カップ 2008 結果(敬称略)

最 優 秀 賞	AQUAE 胡 敏軒(ミシガン大), Yin Jinghua(慶応大), 秋田 勇人(東京大)
ネ ク ス ト 賞	WASEDA ピンクス 稲着 達也(早稲田大), 栗山 和基(早稲田大), 星 洋平(早稲田大)
三 井 物 産 賞	OgK&Company 緒方 健(東京大), 桐生 慎也(東京大), 今西 康雄(東京大)
京 都 大 学 VBL 賞	アースバイプレーターズ 中島 一博(京都大), 久保長 礼(京都大), 伊藤 達朗(東京大)
プロフェッショナル賞	SEEKS 藤本貴士(京都大), 瀬崎 惇浩(京都大), 森岡 卓哉(大阪市立大)
や っ て み ま 賞	douzoyoro 森本 英督(同志社大), 平光 昌寛(慶応大), 山田 麻貴(立命館大)
特 別 賞	やまほたる 堀口 智之(山形大), 小野寺 拓(山形大), 佐藤 瑠美子(山形大)
個 人 賞	稲着達也(早稲田大, WASEDA ピンクス)

(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

## 「外国人留学生の在留審査手続の申請取次に係る研修会」の開催

京都地域留学生交流推進協議会(事務局:国際部留学生課)主催の標記研修会が、平成20年7月10日(木)午後1時30分から、附属図書館 AV ホールで開催された。

この研修会は、留学生業務を担当する京滋地区の大学等高等教育機関の教職員を対象に、外国人留学生の受入手続及び在留資格関係の知識や法令改正等

出入国管理行政の現状について理解を深める目的で毎年開催されるもので、修了者には在留関係諸申請について留学生本人に代わっての取次申請資格が付与される。

特に、留学生がアルバイトをする場合には入国管理局の「資格外活動許可」が必要であり、包括的な取次申請を行うために、担当職員は資格を取得するこ

とが望ましいとされている。

今回は、大阪入国管理局研修・審査部門統括審査官を講師に迎え、本学教職員29名、他機関からの参加者38名の計67名が受講した。

なお、研修会事務を担当した国際交流サービスオフィスでは、研修会終了後に本学留学生事務担当職員を対象とした業務説明会を開催し、宿舍情報等の取り扱いを含めた日常業務の円滑な処理と合理化を図るための要点説明を行った。



研修会の様子

(国際部・国際交流サービスオフィス)

## 日誌 2008.6.1 ~ 7.31

- |                                 |                                    |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 6月2日 役員会                        | 25日 国際交流委員会                        |
| 4日 財務委員会                        | 26日 環太平洋大学協会(APRU)第12回年次学<br>長会議   |
| 9日 オーストラリア首相ケビン・ラッド講演<br>会      | 29日 「地球温暖化」- 京都から国連事務総長へ<br>のメッセージ |
| ♪ 大学記者クラブと総長、理事、副学長、<br>監事との懇談会 | ♪ G 8 大学サミット                       |
| 10日 部局長会議                       | 7月1日 企画委員会                         |
| ♪ 大学評価委員会                       | 7日 役員会                             |
| 13日 学生部委員会                      | 8日 部局長会議                           |
| 16日 企画委員会                       | ♪ 情報環境整備委員会                        |
| ♪ 役員会                           | 12日 白浜海の家竣工披露式                     |
| 17日 教育研究評議会                     | 14日 役員会                            |
| ♪ 創立記念行事音楽会                     | 15日 企画委員会                          |
| ♪ 第1回湯川・朝永奨励賞授賞式                | 16日 国際交流委員会                        |
| 18日 創立記念日                       | 17日 環境・安全・衛生委員会                    |
| 19日 永年勤続者表彰式                    | 22日 役員会                            |
| 23日 名誉教授懇談会                     | ♪ 教育研究評議会                          |
| ♪ 役員会                           | ♪ 財務委員会                            |
| ♪ 人権に関する講演会                     | ♪ 京都大学111周年記念論文コンクール授<br>賞式        |
| ♪ OCW 総長懇談会                     | 28日 役員会                            |
| 24日 経営協議会<br>役員会                |                                    |

## 訃報

このたび、吉田陽一<sup>よしだよういち</sup>名誉教授、植野修司<sup>うえのしゅうじ</sup>名誉教授、木原正雄<sup>きはらまさお</sup>名誉教授、佐竹昭廣<sup>さたけあきひろ</sup>名誉教授、竹崎嘉真<sup>たけざきよしまさ</sup>名誉教授、田代仁<sup>たしろ めぐみ</sup>名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで追悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

## 吉田 陽一 名誉教授



吉田陽一先生は、5月13日逝去された。享年78歳。

先生は、昭和28年京都大学農学部水産学科を卒業、同大学農学部助手、講師、助教授を経て、平成元年教授に就任、農学研究科熱帯農学専攻水産資源学講座を担当された。平成5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。先生は水産実験所長を務めるなど大学の管理運営に貢献されるとともに、多くの優れた人材を育てられた。

先生は水域環境、中でも水質保全に関する研究に

おいて現場を重視した多くの優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、赤潮研究の分野において多大な貢献をされた。(主な著書に「漁業と環境」、「赤潮－発生機構と対策」等がある。)

また、日本水産学会、日本プランクトン学会、日本陸水学会などにおいて、評議員、環境問題調査委員等の要職を歴任された。さらに、多くの環境関連のシンポジウムを企画開催され、学会の発展にも寄与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院農学研究科)

## 植野 修司 名誉教授



植野修司先生は、5月13日逝去された。享年82歳。

先生は、昭和24年3月京都大学文学部を卒業され、同年8月まで同大学院(文学部)に在籍の後、同月京都大学第三高等学校講師に任ぜられた。昭和25年3月京都大学講師(吉田分校、兼ねて宇治分校勤務)、同31年4月同助教授(教養部)、同43年4月教授に昇任、平成元年停年により退職し、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、教養部にあってはロシア語教官として外国語教育に尽力され、一方、大学院文学研究科においても、昭和38年以来、スラヴ諸言語の研究の講義を担当し、研究指導に当たられた。日本での先駆的な研究者の一人として、著書『ロシア古代叙事詩

－イーゴリ遠征物語とその周辺－』、学位論文『ロシア諸年代記に於ける「過ぎし年月の物語」研究』といった時代を画する業績で同分野の研究の確立発展と普及に努め、多数の後進を指導し育成された。ドストエフスキー、シェストフなどの文学・思想史的研究にも寄与され、豊かな学識を背景にロシア文学・文化の紹介をされ、『ロシアの歴史と文学』、『文学のなかの人間』などの著作や多くの翻訳を通して、広く社会にその学問的恩恵をもたらされた。日本ロシア文学会の創設に参画され、理事や関西支部長を歴任するなど、名実ともに日本のロシア語ロシア文学の研究と教育をリードし、その発展に多大の貢献をされた。これらの功績により、平成18年11月、瑞宝中綬章を受章された。

(大学院人間・環境学研究科)

## 木原 正雄 名誉教授



木原正雄先生は、6月24日逝去された。享年90歳。

先生は、昭和16年12月立命館大学法経学部経済科卒業後、満州国総務庁高等官試補、民族研究所助手などを経て、

同24年京都大学経済学部講師に就任、同25年助教授、同43年教授に昇任し、教育・研究指導をとおして多くの優れた研究者を養成された。同56年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、学部長、評議員を務められ、本学退官後は、高知女子大学長を就任するなど、大学行政にも貢献された。

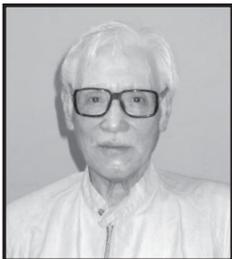
先生は、処女作『ソ同盟経済論』にはじまるソ連邦を中心とする社会主義経済の研究において、この分

野における先達者として大きな足跡を残された。とりわけ、その主著『社会主義経済の理論』は、ソ連邦における社会主義経済の諸問題についての優れた研究である。さらに日本の計画経済、とくに経済の軍事化の進行についての研究も進められ、大きな成果を挙げられた。

先生は、社会主義経済学会、社会主義経営学会、経済政策学会などの諸学会で活躍された。とくに社会経済学会においては創立者の1人として、また幹事として、重要な役割を果たされた。社会的活動では、学術会議会員として、国際学術交流、原子力問題に取り組み、日ソ協会京都府連理事長として日ソ友好に尽力された。また、河上肇記念会代表幹事などを務められた。

(大学院経済学研究科)

## 佐竹 昭廣 名誉教授



佐竹昭廣先生は、7月1日逝去された。享年80。

先生は、昭和27年3月に京都大学文学部文学科を卒業の後、特別研究生として同大学院に5年間在学。学習院大学

を経て、同35年京都大学文学部助教授に任ぜられ、同48年に教授に昇任、同60年3月辞職され、京都大学名誉教授の称号を授与された。その後、成城大学教授を経て、平成5年から9年まで国文学研究資料館館長を勤められた。同6年には紫綬褒章を授与された。

先生の著書を『下剋上の文学』『民話の思想』『酒呑童子異聞』『萬葉集抜書』『古語雑談』『絵入本朝二十不

孝』『萬葉集再読』『閑居と乱世』と並べてみると、上代から中世、近世近代までも広がるその学問の大きさに驚かざるを得ない。言葉のこころの正確な把握を通じて、人のこころを知るという方法意識の透徹したそれらの著書は、国文学研究に一大画期をもたらしたばかりではなく、読書界にも広く歓迎されたものであった。

また『方丈記』『本朝二十不孝』の注釈、『萬葉集』への再三にわたる加注、『標注洛中洛外図』及び『岩波古語辞典』、さらには『京都大学国語国文資料集』全50巻、新日本古典文学大系全100巻の企画と編纂等々。先生の足跡はいずれもくっきりと、大きい。

(大学院文学研究科)

### 竹崎 嘉眞 名誉教授



竹崎嘉眞先生は、7月9日逝去された。享年90。

先生は、昭和15年3月京都帝国大学工学部工業化学科を卒業され、同年4月京都帝国大学化学研究所研究員嘱託、同年6月同大学工学部助手に就任、同22年11月京都大学化学研究所助教授を経て、同26年3月同研究所教授に就任し、高圧化学研究部門を担当された。この間、光化学から高圧化学の研究と大学院教育に従事され、同56年停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

昭和49年4月から2年間、京都大学化学研究所長及び京都大学評議員として、本学の管理運営に貢献

された。本学退官後、同56年4月より7年間京都産業大学教授を勤められた。

先生は、高圧有機合成、特に一酸化炭素や二酸化炭素を利用した新反応の探索を行うとともに、それらの反応機構を明らかにするなど優れた業績を挙げられた。これらの功績により、石油学会から同51年度石油学会賞を受けられた。

先生はまた、こうした研究教育活動の他に、石油学会理事、同学会顧問、日本材料学会高圧力部門委員会委員長として学会の運営に貢献された。これら一連の研究教育活動、学会活動及び国際学術交流活動により、平成2年11月勲二等旭日重光章を受けられた。

(化学研究所)

### 田代 仁 名誉教授



田代 仁先生は、7月16日逝去された。享年90。

先生は、昭和15年3月東京工業大学窯業学科を卒業され、同年5月から同17年9月まで京都帝国大学大学院(工学部)に在学、同年同月京都帝国大学化学研究所研究員、同19年12月同大学助教授を経て、同33年7月京都大学化学研究所教授に就任し、窯業化学研究部門を担当され、同56年停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和53年4月より同55年3月まで、京都大学化学研究所長及び京都大学評議員として、本学の管理運営に貢献された。

先生は、窯業化学、特にガラス科学の分野の研究と教育において貴重な業績を残し、我が国のこの分野の発展に大きく貢献され、その学術的成果の多くは国際的にも高く評価された。また、結晶化ガラスに関する研究では、昭和38年11月に、京都新聞文化賞を受けられた。先生は、こうした研究教育活動の他に、日本化学会常議員、窯業協会副会長を歴任するなど学会の運営と発展に尽力された。さらには、同43年4月には米国セラミックス学会よりフェローの称号を受けられた。

これらの卓越した業績に基づいて、平成2年11月勲二等旭日重光章を受けられた。

(化学研究所)

## 公開講座

## 京都大学森林科学公開講座 「森が拓く未来」

1. 日 時：平成20年10月25日(土)10:00~16:30, 26日(日)10:00~12:00

2. 場 所：京都大学農学部総合館 W100講義室

3. プログラム：

講演会(10月25日)

木質バイオマスのモダン活用ー天然由来素材からこんなモノを！ー	複合材料化学分野	西尾 嘉之
木造超長期住宅を目標とした自然素材活用型木質構造の提案	生活圏構造機能分野	小松 幸平
森の育ち方いろいろー温暖化がもたらす豊富な木材供給の可能性ー	森林利用学分野	大澤 晃
森林利用に伴う流域環境変化と住民の意識	森林情報学分野	吉岡 崇仁
DNA解析によって絶滅危惧種を救う	森林生物学分野	井鷲 裕司

見学・実習(10月26日)

コース1：顕微鏡で見る木の世界	樹木細胞学分野	吉永 新
コース2：木造エコ住宅の秘密を探る(宇治キャンパス)	生活圏構造機能分野	小松 幸平
コース3：森の虫たちと樹木	森林生物学分野	山崎 理正
コース4：熱帯のさまざまな資源植物(京都府立植物園)	熱帯林環境学分野	神崎 護

4. 受講料：5000円 (1日のみ3000円)

5. 定 員：80名(先着順)

見学・実習：コース1 12名, コース4 20名

6. 申込締切：10月14日(火)

7. 問合せ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科森林科学専攻 公開講座係

TEL：075-753-6230 FAX：075-753-6300

E-mail：mori2008@kais.kyoto-u.ac.jp

申込方法等の詳細は森林科学公開講座ホームページをご覧ください。

<http://www.forest-kokai.kais.kyoto-u.ac.jp>

主 催：農学研究科森林科学専攻・生存圏研究所

## お知らせ

総合博物館2008年秋季企画展

「シルクロード発掘70年ー雲岡石窟からガンダーラまでー」

パキスタン北西部のガンダーラ地方では、紀元後まもなく東洋と西洋の文化が融合し、仏像がつくられました。その影響のもとに中国で巨大な仏教寺院として成立したのが雲岡石窟です。京都大学では、人文科学研究所を中心に、仏教文化の源流を求めて、シルクロードの東西に位置する雲岡石窟とガンダーラ寺院址を70年にわたって調査してまいりました。それは精密な考古学的調査をつうじて仏教寺院の全体像を明らかにし、仏教東伝の足跡を掘りおこそうとするものでした。本企画展では日本の海外調査をリードしてきた70年をふりかえるとともに、調査で収集してきた文物をはじめて一般に公開いたします。日本ではほかにみることのできない発掘資料から、シルクロードを彩った仏教文化の魅力を存分にお楽しみください。

1. 開催期間：10月1日(水)～12月27日(土)  
休館日 月曜日・火曜日(平日・祝日にかかわらず)
2. 開館時間：9時30分～16時30分(入館は16時まで)
3. 開催場所：京都大学総合博物館 2階企画展示室
4. 入館料：一般400円、大・高校生300円、中・小学生200円  
上記の料金で、常設展も同時にご覧いただけます。
5. 問合せ先：京都大学総合博物館  
TEL：075-753-3272 FAX：075-753-3277

## 無料法律相談のお知らせ

### —10月実施分について申し込みを受付中—

法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習(リーガル・クリニック)において、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです。(秘密は厳守いたします。)

現在、10月実施分について申し込みを受付中です。

(実施日)10月1日(水)、2日(木)、3日(金)、6日(月)、9日(木)、  
14日(火)、27日(月)、29日(水)、30日(木)

#### [問合せ先]

京都大学法科大学院 リーガル・クリニック担当

TEL：075-753-3262 FAX：075-753-3129(午前10時～午後5時/土日祝休)

詳細は法科大学院ホームページをご覧ください。

<http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/kusunoki.html>

## 宇治キャンパス公開2008

### 宇治キャンパスからのメッセージ —未来を拓くみんなの科学—

#### ○特別展示・総合展示

日 時：10月18日(土) 9:30～16:30

10月19日(日) 9:30～16:30

会 場：総合研究実験棟

#### ○公開ラボ

日 時：10月18日(土) 9:30～16:30

10月19日(日) 9:30～16:30

会 場：宇治キャンパス内の各研究所・センター・研究科の施設

及び防災研究所宇治川オープンラボラトリー

(防災研究所宇治川オープンラボラトリーの公開は10月19日(日)10:00～16:00のみ。当日、宇治キャンパス-宇治川オープンラボラトリー間はシャトルバスをご利用ください。)

備 考：施設により公開日時が異なりますので、詳細はプログラムによりご確認ください。

## ○相談コーナー

## 防災よろず相談コーナー

日 時：10月18日(土)12:00~14:00  
 10月19日(日)12:00~14:00

会 場：総合研究実験棟1階

## 先端研究施設産業利用相談コーナー

日 時：10月18日(土)10:30~16:30  
 会 場：北2号棟 DuET 制御室

## ○公開講演会

日 時：10月18日(土)10:00~12:00

会 場：生存圏研究所木質ホール3階セミナー室

演題と講師：「量子ビームが誘(いざな)う未来の世界」 工学研究科 教授 伊藤 秋男  
 「太陽光発電の将来展望」 エネルギー工学研究所 准教授 佐川 尚  
 「京都大学の新しい宇宙への窓口-宇宙総合学研究ユニット-」  
 生存圏研究所 教授 山川 宏

定 員：150名  
 参 加 費：無 料

## ○各部局公開講演会

## 工学研究科附属量子理工学研究実験センター第9回公開シンポジウム

日 時：10月17日(金)10:00~17:00

会 場：生存圏研究所木質ホール3階セミナー室

演題と講師：「ノンポロジカルソリトンのダークマターとしての可能性」 工学研究科 助 教 小暮 兼三  
 「中性子イメージングの新展開」 原子炉実験所 教 授 川端 祐司  
 「理研RIビームファクトリーの現状」 理化学研究所 神原 正  
 「高強度レーザーとクラスターとの相互作用による量子ビーム発生」  
 日本原子力研究開発機構 福田 祐仁

定 員：150名  
 参 加 費：無 料

## ○生存圏研究所公開講演会

日 時：10月18日(土)13:00~16:40

会 場：生存圏研究所木質ホール3階セミナー室

演題と講師：「セルロースの生合成 -二次元の紡糸機による合成-」 生存圏研究所 准教授 今井 友也  
 「木材の長期使用戦略 -地球温暖化防止と住まいの長寿命化-」  
 生存圏研究所 教 授 今村 祐嗣  
 「レーザービームを振りまわせ!! -大気ライダーのフィールド観測-」  
 生存圏研究所 准教授 中村 卓司  
 「『かぐや』による月の科学, 月での科学, 月からの科学」 生存圏研究所 教 授 橋本 弘蔵

定 員：150名  
 参 加 費：無 料

## ○化学研究所公開講演会

日 時：10月19日(日)10:00~12:00

会 場：生存圏研究所木質ホール3階セミナー室

演題と講師：「身近な『ペプチド』:いのちの基本からくすりまで」  
「高分子を生やす-新しい表面機能の創出」

化学研究所 教授 二木 史朗

化学研究所 教授 辻井 敬巨

定 員：150名

参 加 費：無 料

## ○樹木観察会(雨天中止)

日 時：10月19日(日)13:00~

集 合 場 所：生存圏研究所バーチャルフィールド材鑑調査室前

主 催：京都大学宇治キャンパス公開2008実行委員会

問 合 せ 先：京都大学宇治地区事務部研究協力課

E-mail：kokai2008@uji.kyoto-u.ac.jp

TEL：0774-38-3352 FAX：0774-38-3369

詳細はホームページをご覧ください

<http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/open-campus/2008.html>

## 「テクノ愛'08」

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)は、身近な生活に役立つ技術から最先端技術まで多彩なアイデアを競う発明コンテスト「テクノ愛'08」(テクノ愛実行委員会主催、京都大学VBL・財団法人近畿地方発明センター共催)の開催を予定しており、アイデアを募集しています。本コンテストは、ものづくりから科学技術、また起業化への関心を高めてもらう狙いで毎年開催しており、今年で12回目を迎えました。過去の入賞者の中には、2足歩行ロボットを事業化して起業するなど、入賞アイデアのいくつかは特許出願、商品化されています。また希望者には、起業、特許についての基本的なアドバイスやサポート(特許相談室や起業相談室といったVBLの支援プログラム)も積極的に行っています。

応募作品は書類選考を経て11月23日(日)にコンテストにて発表審査し、グランプリを決定します。優秀なアイデアには、表彰とノートパソコンや2足歩行ロボットなどの副賞が授与されます。応募資格は、高校生から高専生、大学生、大学院生、若手研究者で、ハイテク、生活アイデア、エコカーの3部門についてアイデアを募集します。募集締め切りは、高校の部が9月12日(金)まで、大学の部が10月12日(日)までとなっています。

1. 発表審査：11月23日(日)
2. 応募資格：高校生から高専生、大学生、大学院生、若手研究者
3. 募集締切：高校の部 9月12日(金)、大学の部 10月12日(日)
4. 問合せ先：TEL：075-753-7578, E-mail contest08@vbl.kyoto-u.ac.jp  
詳細はベンチャー・ビジネス・ラボラトリーホームページをご覧ください。  
<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Contest/>

## 隔地施設 紹介



### 防災研究所 附属流域災害研究センター 白浜海象観測所 (<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/~rcfcd/frs/SOO.htm>)

関西の南部にあたる紀伊半島は、西南日本外帯に位置し、「近畿の屋根」と称される大峰山脈や白馬山脈、雄大な海岸線、豊かな水量により発達した蛇行河川などにより特徴づけられます。ここでは、黒潮に洗われる温暖な気候のもと、貴重な動植物及び生態系が維持され、果実や水産物にも恵まれています。また、鬱蒼とした森林に覆われた山々は神仏の宿る場所として古くから信仰を集め、自然と人間の信仰心が一体となって織りなす文化的景観が評価され、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことは記憶に新しいところです。一方、わが国多数の多雨地帯である大台ヶ原を控え、台風の上陸地点となることも多く、さらに東南海・南海地震とも関連する南海トラフの存在など、自然災害が頻発する地域でもあります。このように、多くの魅力的な研究対象の存在に加え、京都からの距離も比較的近いことから、紀伊半島、とりわけ和歌山県には本学の多くの研究施設が配置されています。今回は、和歌山県西牟婁郡白浜町に位置する、防災研究所 白浜海象観測所をご紹介します。

**沿革** 白浜海象観測所の前史は、1961年、和歌山県田辺湾南部、通称田尻クズレの鼻沖合300mの地にわが国最初の海洋観測塔が設置されたことに始まります。この観測塔では、各種気象(気圧、雨量、気温、風向・風速など)及び海象(水温、潮位、波浪、流向・流速など)が連続的に観測され、その成果が認められて、1966年に防災研究所の附属施設として白浜海象観測所が設置されました。その後、1968年観測所本館竣工(1982年増築)、1985年新造観測船「海象」就役、そして1993年には田辺湾口部(番所鼻北約1.8km)に新しい定点観測施設である田辺中島高潮観測塔が設置されるなど、施設・設備の拡充が行われてきました。組織としては2005年に附属流域災害研究センターの観測施設となり現在に至っています。

**研究・教育** 白浜海象観測所では、海洋観測塔の設置以来、田辺湾を中心とした沿岸域において各種の気象及び海象現象を総合的に観測し、沿岸海域における海洋・陸面及び大気との相互作用の解明に取り組んできました。また、波浪・高潮・津波・海況変動などによる海岸・沿岸海洋災害の防止・軽減を目指した研究を進めてきました。田辺中島高潮観測塔は、2008年7月現在、実質的にわが国で唯一稼働中の沖合固定海洋観測施設であり、共同利用・共同研究が活発に行われています。最近では、地球温暖化現象との関係が指摘される大気～海洋間の二酸化炭素輸送量の観測や、洋上風力発電の実用化に向けた海上風況に関する基礎研究などを推進しています。さらに、沿岸域での長期地形・環境形成プロセスにおいて洪水・津波などの災害イベントが果たす機能の評価や、大気～陸地(河川)～海洋を繋ぐ「流域圏」研究における沿岸域モニタリング・サイトとしての役割など、新しい研究展開も始めています。一方本観測所は、大学等における教育の実習施設としても活用されており、流域災害研究センター潮岬風力実験所と共同で、新入生向け少人数セミナー(ポケット・ゼミ)「空を観る、海を観る、川を観る」や、理学研究科「気象海象観測フィールド実習」などの科目を提供しています。

**社会貢献** 白浜海象観測所が立地する白浜町には、その名の由来となった白良浜があります。その海岸は、白い砂浜と青い海が美しいコントラストをなし、波の静かな遠浅の浜は人々を魅了して止まず、毎年60万人近くの海水浴客が訪れます。本観測所では、白浜海岸の整備や環境保全と関連して、和歌山県・白浜町・本学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所などと協力して調査を実施する



田辺中島高潮観測塔



ポケット・ゼミでの実習風景

### 職員構成

准教授1人, 助教1人,  
技術職員1人

など、防災・環境・利用のバランスの取れた海岸を目指し、地域の方々と共に取り組んでいます。

一方、高潮観測塔で観測されたデータの公開も社会貢献の重要な要素となっており、例えば海上保安庁や日本海洋データセンターへ関連データを

提供しています。さらに身近なところでは、地元の漁師さんがその日の海の様子を知るための参考とされていることもあるようです。観測データは、観測所のホームページ(<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/~rcfcd/frs/SOO.htm>)からどなたでもご覧いただけます。アメダスなどによる陸上データと洋上のデータとでは、風向・風速などが随分異なることが多々ありますので、是非一度お訪ねいただきご確認ください。

**おわりに** 白浜海象観測所は、3年後には(初代)海洋観測塔設置50周年を迎えます。次の50年を見据え、本観測所では、これまでの海岸・沿岸域防災に加え、「紀伊半島」「流域圏」のキーワードのもと、統合的な流域管理システムの構築、マルチ・スケール水・土砂・物質動態の解明、生存基盤の安定に向けた防災学と生態学の融合などの課題に対し、沿岸域の視点から取り組んでいくつもりです。また、これらの取り組みをより実効的に進めるためにも、地域の方々と一層手を携えていく必要があると考えています。観測所の今後の活動を引き続き温かく見守っていただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

〒649-2201

和歌山県西牟婁郡白浜町堅田2347-6

電話：0739-42-4352 FAX：0739-42-5532

E-mail：muto\_yas@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp

### アクセス

- ・JRきのくに線白浜駅より車で5分
- ・阪和自動車道南紀田辺IC～田辺バイパス(国道42号)～白浜道路(県道33号)経由、とれとれ市場手前を右折、京都より約3時間

## 防災研究所 附属流域災害研究センター 大潟波浪観測所 (<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/~rcfcd/frs/Ogata.htm>)

日本海に面する新潟県上越市四ツ屋浜に大潟波浪観測所があります。日本海沿岸域では、台風来襲も脅威ですが、毎年確実に発生する冬期の強風と暴浪の相乗による海岸波浪場への備えが特に重要になります。砂浜—砂丘システムは天然の防護装置ですが、観測所が立地する大潟海岸の砂浜と海岸砂丘(潟町砂丘)は、ラグーン跡の発達した高田平野の最前線の防護ラインとみることもできます。複雑な海岸波浪や漂砂の特性を明らかにするために、1964年から波浪観測が実施されてきました。当初は帝国石油(株)第一人工島棧橋を借用して波浪観測が行われましたが、その研究実績が高く評価され、1969年に附属施設大潟波浪観測所の設置、1981年に観測所本館新営、1986年には専用観測棧橋(T型)の新設と研究環境の充実が図られました。爾来、「大潟海岸に学ぶ」講演会を地域の方々の支援のもと、定期的に開催しています。

わが国では、近年、海岸侵食の進行が大きな課題になっています。大潟海岸においても海岸侵食が顕在化し、かつての自然の砂浜の面影はありません。観測棧橋西側の土底浜は特に侵食の激しいところですが、最近90年間の汀線後退量は70mに達します。海の砂はどのようにして、どこに移動したのでしょうか?この命題に応えるのが、流域災害研究センターの大きなミッションの一つです。ポイントは、漂砂セル(対象海域)における堆積物(砂)の収支を高解像度でとらえ、海水の運動との繋がりを明らかにすることです。地球温暖化にともなう海面上昇によって深刻な影響をうける環境システムの一つが、砂浜—海岸砂丘—潟湖システムです。大潟観測所の立地環境は、まさに将来を見据えたフィールド研究の場として重要性を増すものと考えられます。

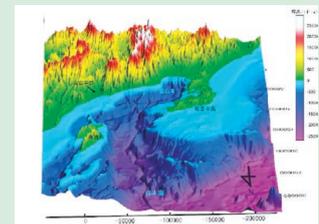
〒949-3111 新潟県上越市大潟区四ツ屋浜

TEL & FAX：025-534-2414

E-mail：sekiguch@ujigawa.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

### アクセス

- ・JR信越本線潟町駅より徒歩20分
- ・北陸自動車道大潟スマートICより5分



大潟海岸周辺の地形



大潟海岸における海岸侵食状況



最近90年間の汀線後退量